

「思いをはるかに超えて」(エフェソ 3章 14～21節)

1 祈り、祈られ

整った、長いローマの信徒への手紙から、フィレモン宛てに書かれた一章だけの私信まで、聖書にはパウロの手紙が多く残されていて、それらは全体として、彼の信仰と使徒としての多面的な働きを証ししています。またそれらはそのままキリスト教信仰の輪郭を示すものともなっています。エフェソの信徒への手紙もそうした彼の手紙の一つです。今日の箇所には彼の祈りが記されています。

こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります(14節)。

パウロの手紙の特色はいろいろあると思いますが、その一つは、少し語弊があるかも知れませんが、かなり自分を語っているところにあると私は思っています。自分を語っているというのは、自分の信仰の経験に立って、それを離れないで福音を語っている、証しているという意味です。ご承知のように最初パウロは教会の迫害者として聖書に登場します。しかし彼は復活のキリストに出会い、回心して伝道者になった人です。それゆえ彼は最後まで自分は「罪人のかしら」(1テモテ1章5節)である、使徒としては「月足らずで生まれたような」(1コリント5章8節)存在だと言い、そういう者として恵みを受けたのだ、値しないのに神は顧みてくださったのだと人々に説きつづけたのです。彼はかっこいい自分を語ったではありません。人より優れた自分を語ったわけではありません。罪人である自分を語ったのです。かっこよく語ろうとすれば、ユダヤ教における彼の業績からしてできたかも知れません。しかしそうしなかった、そうできなかった、そんなことをしたら、そうしている矢先から神様からどんどん離れていってしまったことだろうと思います。彼は、自らの信仰の実体験にてらしながら、人間のどんな罪より神の恵みのほうが大きいと語ったのです。世のすべての人々のためにキリスト・イエスにおいてすでに差し出された神の愛を語ったのです。自分を語ったというのはそういう意味です。それがパウロという人でした。

エフェソの手紙にはそうしたことを典型的に示す箇所はありません。しかし自分の信仰の経験を離れて福音を語らなかつたということは、この手紙についても言うことができます。それを示すのが、彼が手紙の中で記している祈りではないかと私は思います。エフェソの手紙は祈りで始まり祈りで終わるだけでない。このそれほど長くない手紙の二カ所で自分の祈りを書いていきます。その一つがここです。彼は獄中で(6章1節、6章20節)手紙を書いています。祈りながら書いています。書きながら祈っているのです。私どももしばしば「祈っています」と書くことがあります。しかしそ

のとき、書く手を止めて、祈っているでしょうか。そうすることは多くない。パウロはそうではありませんでした。彼は書きながら祈り、祈りながら書いた、それが彼の手紙です。それが私どもにも宛てられた彼の手紙なのです。

パウロは祈っています。エフェソの人々は祈られています。じつさい自分が祈られていることを知ることほど、神の恵みを私どもが身近に感じるときはない。自分の祈りの言葉よりも他人（ひと）の祈りの言葉を聞くときのほうが不思議に私どもは力強く感じます。自分の口よりも、兄弟姉妹の口から聞こえるキリストの言葉には力があります。私が駆け出しの牧師の頃、ですからもう何十年前のことですが、『信徒の友』の祈りの交わりで全国の教会から祈りの便りをいただき、中には筆達者な毛筆に絵を添えたようなものまであり、感激したのを今も覚えています。こうした祈りのことはよく知っていましたし、信徒としてしばしば署名もしていたはずですが、牧師としてそれらの便りを直接手にしたときの感激は特別のものでした。祈られていることを知ることは本当に力なのです。

パウロもそのことをよく知っていました。祈ってもらうことの大切さを知っていました。彼は人のために祈るだけではありませんでした。祈られることの力もその必要も知っていました。それゆえこの手紙の終わりのほうにこう書いています。「わたしが適切な言葉を用いて話し、福音の神秘を大胆に示すことができるように、わたしのためにも祈ってください」（6章19節）。こうして獄中の祈りの中で記された手紙がエフェソの信徒への手紙です。

2 内なる人が強められて

自分のためにも祈ってほしい、と書いたパウロでしたが、エフェソの人々のためにここで彼は何を祈っているのでしょうか。何を神に願い求めているのでしょうか。少し込み入った箇所ですが、二つに分けて理解すれば、多少とも分かりやすいように思えます。はじめに彼はこう祈ります。

どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるよう（16-17節）。

パウロの祈り願っているのは、エフェソの教会の人たちが「愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者」となることです。そのためにはキリストの愛を彼らを理解しなければならぬ、そこで次に、パウロは、こう付け加えています。

キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識

をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように（18-19節）。

キリストの愛を理解し、それがどれほどの大きさを日々感じとって、神の豊かな恵みに満たされるようにパウロは祈り願っています。神の豊かさすべてにあずかるのは、「ついには」と言っていますので、最終的には終わりの日に実現されることと言わざるをえないものです。上から私どもに与えられるものであり、私どもの目指すゴールでもありません。

しかしこうした高い目標へ向かう出発点は、いまここにあるのです。それは神のみ力によって「内なる人」が強められることです。「内なる人」という言葉をこの箇所のほかパウロはもう一カ所で使っています。コリントの手紙Ⅱです。「だからわたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの外なる人は衰えていくとしても、わたしたちの内なる人は日々新たにされていきます」（4章16節）。「外なる人」とは人間の身体的存在、「内なる人」とは人間の心のことだと考えるとすれば、それは十分ではありません。外なる人と内なる人を、古い人間、新しい人間と言い換えたらよいと思います。「内なる人」とは信仰によって新しく生まれ変わった人間のことです。キリストによる罪の贖いを受け、いまここで復活の命にあずかり、人生の方向転換をなし、世にあつてなおさまさまな困難と軋轢の中に置かれていても、新たな人生目標を目指して歩んでいる人間のことです。この「内なる人」が聖霊によって強えられること、そこが始まり、出発点です。

ニーチェの言葉に、なぜ生きるかを知っている者は、ほとんどのような状況の生活にも耐えることができる、という言葉があります。私はこれを昔有名なヴィクトール・フランクルの『夜と霧』という本で知りました。生きる意味を知っており、その生活目標を目の前にもつていた人、そういう人たちが、あの過酷な強制収容所の中でお内面的に崩壊しなかった、フランクルは体験に基づいてそのようなレポートをしています。キリスト者も、なぜ生きるか、何のために生きるかを知っている存在だと思っています。自分のためではなく、神のために、ただ神の栄光のために生きる、それがキリスト者です。人生を自分のために期待するのではなく、神が私どもの人生に何を期待しているかを問題にする人間、そういう問いをなくさない人間、それがキリスト者です。内なる人が強くされるといふのはそうしたキリスト者としての、信仰者としての私どもがその在り方において聖霊によって強くされるということです。内なる人が強められることをパウロは祈り願っています。

3 栄光をたたえる

今日の箇所はパウロの祈りです。この祈りは、「主の祈り」もそうであるように神の栄光をたたえることで終わっています。

わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおおきになる方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン (20-21 節)。

なぜ祈りは神の栄光をたたえることで終わるのでしようか、終わらなければならぬのでしようか。それはキリスト教の祈りは、自分の願いや思いを神に対して押し通すことではないからです。神の力を借りてでも実現させることが祈りではないからです。なるほど祈りは願うことです。人が願うことの中に信頼も感謝も悔改めもあります。なぜならその方に、ただその方だけに願うからです。私どもは率直に祈り、また願います。「求めたり、思ったりすること」をどんなことでも祈り願います。キリストのみ名というフィルターを通して祈ります。それによって私どもの祈りはきよめられます。聞きとどけられません。しかしそれを御心にしたがって実現してくださるのも、私どもが考えているような仕方を実現してくださらないのも、それは神です。それゆえ最後に神に栄光を帰すのが私どもの祈りです。

もう一つ、祈りが、栄光をたたえることを終わらなければならないのは、神は「わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおおきになる方」だからです。主イエスのゲッセマネの祈りをここで思い起こすべきだと思います。それは十字架の死の前にした最後の祈りでした。このとき祈りは戦いでした。その戦いで弟子たちが眠りこけ、共に最後までそれに参与できなかったのはまさに弱さでした。

ゲッセマネで主イエスは、三度も十字架の死の苦杯を取り去ってくださいと祈ります。十字架の死が救い主としての自分が歩むべき道なのか、彼は最後まで神に問うています。しかし死の苦杯を取り去ってくださいという自らの願いが、イエスの最後の言葉ではありませんでした。「御心が行われますように」というのが、その最後の言葉でした。祈りでした。「思いをはるかに超えて」御心をなす神に彼はすべてをゆだねたのです。自分の思いが、自分の都合のよいことなることではない。御心がるのです。それは私どもにとって大変厳しいことが少なくない。「天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いは、あなたたちの思いを、高く超えている」(イザヤ55章9節)と言われる神です。その神の御心に適うことがなりません。私どもは、ただ神の御心なれかしと祈るほかありません。また御心なれかしと祈るのです。エフェソの信徒への手紙は、私どもキリスト者の人生目標を神の栄光を現すこととしてこの手紙のはじめから明らかにしています。神の栄光あれかし、これが、私どもの人生の祈りであり、そしてここではっきり聖書が語っているように、それは教会の祈りでもなければなりません。

(2018年5月13日)